

高齢者施設における利用者の役割について ——ケアと役割に関する共同調査から（1）——

清水 稚砂美¹, 茂藤 裕子², 鈴鹿 恭子³, 山崎 優子⁴

1) ケアマネセンターあんき 2) 小野田老人ホーム 3) 昭和町共生苑 4) グループホームあつぷる

I. 研究目的

デイサービスを利用する高齢者の中で、「デイに行く＝仕事に行く」と言う言葉をよく耳にする。また、施設入所中の高齢者においても、「作業＝仕事」と理解している人も少なくない。高齢者にとって「役割」や「役割を持つこと」の意味は一体どのようなものなのだろうか。

役割を持つことの意味を研究するにあたり、高齢者の「役割」についての定義は探し出せなかった。「役割」とは何か。広辞苑によると、1. 役をそれぞれに割り当てる事 2. 割り当てられた役。人間が社会的地位に応じた権利・義務に従って行う行動様式¹⁾とある。

実際にケアに携わっている私たち介護職員は、利用者のニーズや適性に合った「役割」を提供することができているだろうか。そのような関心のもと、デイサービスを利用する高齢者や施設に入所中の高齢者にとって「役割を持つこと」が、その人の生活の質を向上させる上でも重要な意味を持つのではないかと考え、今回の研究では、いくつかの調査（アンケート、観察記録、利用者からの聞き取りなど）を実施した。そして、アンケート調査のデータに注目・限定して介護職員の意識を明らかにするとともに、介護サービスにおける「役割」の持つ意味について、考察したい。

II. 研究方法

1. 対象

山口県介護福祉士会 宇部小野田圏域にある94施設（養護老人ホーム3・特別養護老人ホーム7・有料老人ホーム6・デイケア9・デイサービス17・グループホーム13・老人保健施設8・療養病床の病院（医療保険）7・療養型医療施設（介護保険）6・ケアハウス5・ヘルパーステーション7・障害者支援施設4・その他2）の中より抽出した職員を対象にアンケートを実施。

配布部数 1325部

回収数 1159部

回収率 87.5%

有効票 1007票

有効回答率 76.0%

2. 調査方法

留め置き法による自記式質問紙調査

3. 調査実施期間

2009年10月10日～11月20日

4. 主な調査内容

職員の基本属性に加え、介護職員からみた利用者の現状および介護職員の意識、について16項目の質問を実施。

5. 調査に際しての倫理的留意

調査実施に際しては、当該施設の倫理委員会に承認を得るとともに、調査対象者への調査目的の説明を行い協力の同意を得た。調査データの取り扱いに際しては、対象者のプライバシー保護に留意し、データ管理責任者を決めて一元的に管理を行った。

6. 分析方法

アンケート調査のデータを勤務先の分類種別で比較・検討しクロス集計を行う。

表1 勤務先の分類種別

病院	療養型医療病棟・療養型介護病棟
入所系	養護老人ホーム・グループホーム・ケアハウス・有料老人ホーム・特養・老健
在宅系	デイケア・ヘルパーステーション・デイサービス
その他	障害者支援施設・未記入 ※但し、その他に含まれている障害者支援施設においては利用者が高齢者とは限らない為、結果ではふれない。

III. 結果

1. 利用者の方についての質問

問1-3「利用者は普段、楽しくてやりがいのあることを持っていると思うか」という質問に対して、下記の【図1】のような結果が見られた。やりがいを持っていると思うが全体の28%、思わないが72%と

いう結果となった。

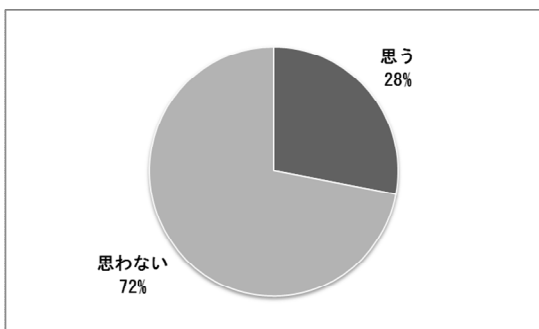


図1 利用者は普段、楽しくてやりがいのあることを持っている

また、【図2】のように、問1-5「利用者が自分は誰かの役に立っていると感じている」という質問に対しても、77%が思わないと答えていることがわかる。

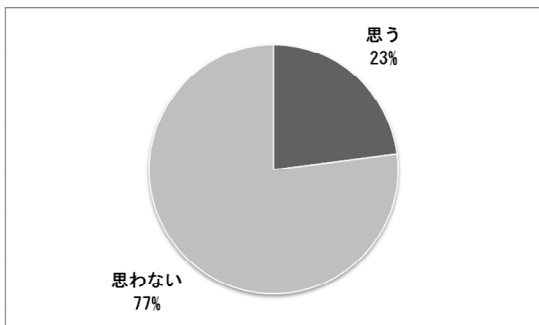


図2 利用者は自分が役に立っていると感じている

次に、勤務先の分類種別で質問項目ごとに見た。思わないを1点、思うを4点（中間値を2.5）とし、4段階で利用者をどう捉えているかを点数化し平均を出した。

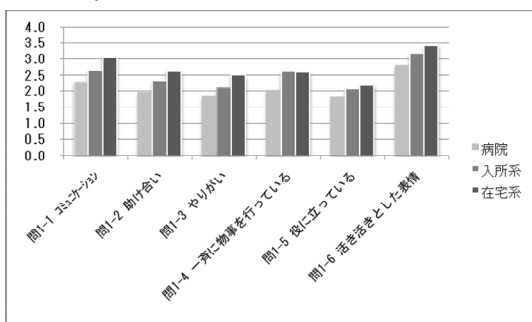


図3 利用者についての質問
(勤務先の分類種別平均)

問1-1 から問1-6 まで全体的に在宅系の点数が高く出ているが、問1-4「利用者は共同スペースで一斉に何かをすることが多い」に関しては入所系が在宅系の点数を上まわっていた。反対に全ての質問にお

いて病院が低く出ていることもわかる。

問1-6「利用者が誰かに感謝の気持ちを表されたとき、その利用者の表情は生き生きとしている」ほどの勤務先の分類種別においても2.8から3.4と高い点数が出ている。

問1-3「利用者は楽しくてやりがいのあることを持っている」問1-5「利用者は自分が誰かの役に立っていると感じている」については先にも述べたように、勤務先の分類種別ごとにおいても平均値が中間値2.5点を下まわる結果となっている。

2. 介護職員としてのあなたについての質問

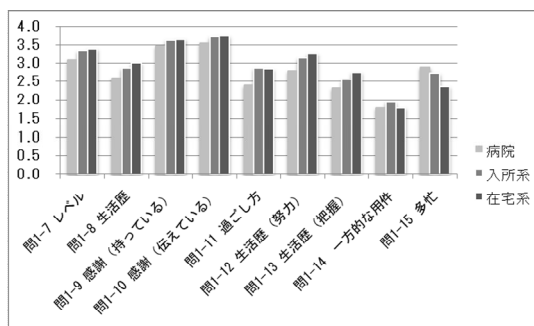


図4 介護職員としてのあなたについての質問
(勤務先の分類種別平均)

利用者に何かをしてもらう時に重視する点として、問1-7「その方のレベルに合ったものを提供している」問1-8「生活歴にあったものを提供している」と答える介護職員はどの勤務先の分類種別においても平均値が中間値(2.5)以上であった。どの勤務先の分類種別もレベルを重視する方が生活歴を重視する方を上まわっている。

表2 勤務先の分類種別ごとの
利用者のレベルと生活歴の平均値

	病院	入所系	在宅系
問1-7 レベル	3.08	3.35	3.40
問1-8 生活歴	2.61	2.87	3.01
問1-9 感謝(持っている)	3.47	3.63	3.66
問1-10 感謝(伝えている)	3.56	3.72	3.74
問1-11 過ごし方	2.40	2.87	2.85
問1-12 生活歴(努力)	2.80	3.14	3.28
問1-13 生活歴(把握)	2.33	2.56	2.76
問1-14 一方的な用件	1.79	1.95	1.79
問1-15 多忙	2.89	2.73	2.37

問 1-9「利用者には何かしてもらった時、利用者に対して感謝の気持ちを持っている」問 1-10「感謝の気持ちを伝えている」は、どの勤務先の分類種別も平均 3.4 以上で高い点数が表れた。

問 1-14「利用者に対して、一方的に頼みごとをしている」の平均値は全ての勤務先の分類種別において 2.0 以下という低い点数が出ている。また、問 1-15「利用者とのコミュニケーションが、介護職員が多忙のために取れない」は病院の 2.9 をはじめ入所系・在宅系とつづき、施設の種類別すべてが中間値 2.5 を上まわっている。

3. 介護職員が抱く利用者の役割イメージ

表 3 介護職員が利用者の役割に抱くイメージの

特徴・傾向	
分類	よく使われたワード
本人の充実感	いきがい・簡単な作業・人の役に立てる喜び など
手段としての役割	ADL 維持・認知症予防など・コミュニケーションの一環
「存在」としての役割	その人らしく生きること・存在感・個性 など
消極的な意見	役割という言葉は適当ではない・患者なので関係ない など

表 4 勤務先の分類種別ごとの介護職員が利用者の役割に抱くイメージの特徴・傾向

	よく使われたワード	回数
病院	身の回りのできること・家事援助など・お手伝い	14
	ADL 維持向上・残存機能の活用	7
	退院・療養すること	5
入所系	身の回りのできること・家事援助など・お手伝い	75
	いきがい・やりがい	16
	人の役に立てるといふ満足感・喜び・支え合い助け合い	9
在宅系	身の回りのできること・家事援助など・お手伝い	24
	存在感・価値観・尊敬に値する存在	8
	いきがい・やりがい	7

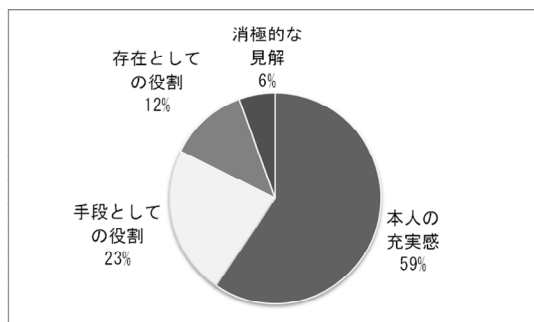


図 5 自由記述からみた結果

問 1-16「利用者の「役割」という言葉を聞いて何を思い浮かべますか？」では自由記述での回答を求めた。自由記述回答数は 245 票、有効回答数に対して 24.3%の回答率である。内訳として、病院 47 名、入所系 129 名、在宅系 48 名の回答であった。自由記述をまとめるにあたり、一人の記述の中にそれぞれ意味の異なるものが重複しているケースが多くみられた。そのため、一文に含まれる単語（ワード）ごとに分割し集計を行った。介護職員が利用者の役割に抱くイメージの特徴・傾向は 4 つに分類することができた。多いほうから本人の充実感・手段としての役割・存在としての役割・消極的な見解である。病院・入所系・在宅系に分類すると表 4 に示す結果となった。

IV. 考察

以上の結果から、各々の介護職員が抱く「利用者の役割」の考え方は、勤務先の分類種別の機能と大きく関わっているといえよう。

病院とは、健康を取り戻して元気に家庭・地域へ戻ることが出来るようにする。「医業を行う場所」といえよう。そして、病院に勤務する介護職員は病気を治すことが利用者の主な役割と捉えていることが、自由記述からわかる。これに対し、入所系は、「日常生活を支える場」であり、家庭に近づく支援を心がけようとするため、生活の質 (QOL) に注目した傾向がみられる。つまり、生活に身近な役割への関心が高いと考えられる。在宅系は住み慣れた地域での生活を支援する機能を持つ。アンケートからも 15 個の質問項目中 11 項目において病院・入所系に比べ、高い平均値を示していた。これは、地域で家族と共に暮らす利用者の生活を見ているので、利用者やその家族の想いが直接介護職員に伝わるからではないかと推測される。ただし、今回の調査では、利用者および家族の想いについては、アンケートを行っていないので、深く分析するためには今後の調査が必要であろう。

当初、「役割」とは「仕事」という捉え方ではなく、利用者ひとりひとりの生活歴やレベルに合ったものが理想であると考えていた。これまでは、「共同スペースで一斉に何かをする」ということは、作業的(＝ネガティブ)なイメージが強かった。しかし、今回のアンケートの自由記述でわかったように、「身の回りのできること・家事援助・お手伝い」など生活に密着したもので本人にとって充実感があれば、それは介護職員の共通の理解としての「役割」と考えることもできよう。これは自由記述を整理した結果からも見てとれるように、上位に占めているワードが「本人の充実感」となっていることからいえる。

利用者がやりがいを持って過ごせていない現状が感じられ、介護職員も多忙で利用者とのコミュニケーションが図れないという現状を抱えている。しかし、介護職員は利用者に対し、一方的に頼みごとをしているわけではなく、利用者に関わりを持とうと努め、感謝の気持ちを持ち、それを表していることが今回再認識できた。またそれは利用者に対しての重要な支援の一つだといえよう。その積み重ねが利用者のやりがいや活気、そして笑顔につながることを期待したいところでもある。

V. 結論

介護職員は利用者のニーズや適性に合った役割を提供しようと努めている。

利用者が支援を受ける環境によって役割のもつ意味および介護職員の意識に差異があることが明らかになった。

謝辞

本研究にご協力くださった関係施設の責任者および介護職員の皆さまに深く感謝いたします。

また、ご指導いただきました矢原隆行先生をはじめ、社会学研究者の園田浩之先生、浅利宙先生、福井祐介先生、大島啓先生に心からお礼申しあげます。

引用・参考文献

- 1) 新村 出 (1974) 「広辞苑 第二版」岩波書店
- 2) 小野寺 敦志 (2005) 「認知症高齢者に対する生活支援の試み 応用行動分析的視点を用いた役割行動の再構築」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』 No. 6, 291-302
- 3) 湯川 夏子・我如古 菜月・明神 千穂・前田 佐江子・平嶺 富美子 (2008) 「高齢者施設における「料理療法」の試み 一方麻痺

認知症高齢者を対象とした事例報告—『京都教育大学紀要』 No. 112, 2008